

# 生大防ぼれこち落

夫勝上持



## 本を開くように、見開きページで読むことができます

推奨 : Adobe Reader (最新)

「表示」から「ページ表示」を選び、「見開きページ表示」を選択します。

※モニターの光量は必要最低限にしてください。(ペーパーモード推奨)

## 液晶モニターで文字が読みにくいと感じた場合の調整方法

Adobe Readerの「編集」で「環境設定」を選択します。

「分類」の「ページ表示」を項目選択して、「レンダリング」の

「テキストのスムージング」から「液晶画面用」を選択します。

「画像のスムージング」等の項目にも、チェックを入れた状態にします。

## 紙に印刷できます

Adobe Readerの「印刷」をクリックして、ウィンドウを開きます。

「プリンター」の種類を指定し、「印刷するページ」で「ページ指定」にチェックを入れて、「2-265」と数値を指定してください。

「ページサイズ処理」で「複数」をクリックし、「1枚あたりのページ数」を「2」にします。

「ページの順序」を「横 (右から左)」に指定します。

「ページ境界線を印刷」にはお好みでチェックを入れてください。

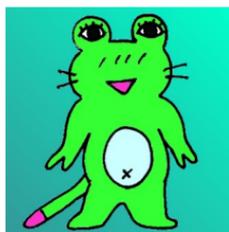
※プリンターのプロパティで逆順印刷を指定し、最終ページから印刷することをお勧めします。(各プリンターの説明書をご確認ください)

表紙 (1ページ) を印刷するときは、表紙を表示させた状態で「印刷」のウィンドウを開き、「印刷するページ」で「現在のページ」を選択します。

媒体の形式に関わらず、第三者への譲渡・配布、購入者本人の個人的バックアップ目的以外でのコピー、内容・体裁の改変、常識の範疇を超える長さ及び作品名と著者名無記載での文章の引用・抽出、これら全てを禁止します。

# 落ちこぼれ防大生

井上勝夫著



SASURAI文学

青春を苦笑いで思い出す大人たち、そして今まさしく青春と格闘している若者たちに。

落ちこぼれ防大生

もくじ

一年生

暴力指導	9
石コロの生活	25
武道という道	41
楽しい夏、つらい夏	45
標的	49
酔っ払い指導	57

二年生

カッター訓練	68
熱	74
十代の終わり、二十代の始まり	78
墮落	85
再起を懸けて	89
昭和から平成へ	92

## 再びの二年生

暗闇の集団指導	99
サバイバル・ゲーム	109
防大の怖い話	113
自由の夏	118
危機来訪	121
喧嘩 <small>けんか</small> 修業	127
入院生活	132

## 三年生

異端	136
再会	140
北の大地	145
連続脱 <small>だつぎく</small> 柵	148
殴り合い	153
オートバイ免許	158
時計台の夜の酒盛り	161

## 四年生

墮落との訣別 <sup>だらく けつべつ</sup> .....	167
屋上の特訓 .....	174
燃える訓練 .....	185
白い夏 .....	197
規則のない防大生活 .....	201
終わり行く日々 .....	210
卒業 .....	222
自由の空へ .....	232

あとがき .....	241
卒業して十四年後の、本人による解説 .....	244
危機に直面した今の時代に思うこと .....	255

著者は1987年に第35期生として入校。1992年に第36期生として卒業。

落<sup>お</sup>ちこぼれ  
防<sup>ぼう</sup>大<sup>だい</sup>生<sup>せい</sup>

灼熱の焰ほのおが 燃えあがる松明たいまつの如ごとく

君から噴き出る時

君は知らず 自由の身なるを

君は知らず すべて失なわれし時

灰も昏迷こんめいも燃えるものより残され

その灰の底に ダイヤモンドが横たわり

永遠の勝利の暁あかつきに 星の如く輝けるを

ノルヴェイッド 「舞台裏にて」より

# 一年生

## 暴力指導

一年生

《これが俺の顔か…》

消灯後の洗面所の鏡に映った自分の顔を見て、俺はぐったりとした気持ちになった。顔の左半分は真赤になって二倍にも膨れ上がり、目は腫れた目蓋のせいで半分くらいの細さになっていた。右顔も頬が腫れて、じんとうずいている。

《あいつら…》

自分の顔をこんなふうにした四人の四年生たちを思い浮かべた。ボクシング部主将、柔道部主将、合気道部統制、パラシュート部キャプテン。ボクシング部主将の桑原以外は、三人とも百八十五センチを超える大きな連中だ。特にしつこく殴ってきたのは、柔道部主将の関田だった。

彼らは同じ大隊の上級生で、消灯後に俺を自分たちの部屋に呼び出したのだ。理由は、なんとくでもないことだった。

その日の夕方、俺はクラブ活動で擦りむいた肘の様子を見るために、混雑した風呂場びじの出入口近くで袖そでを捲まくっていた。

「何やっとなじゃ」

チンピラが因縁いんねんをつける目つきで、一人の上級生が俺の前に立った。

《立っている場所がじゃまだったのだろうか》

そう思っ自分の位置を確かめるように後ろを見た。

「なんじゃー！ その態度は！」

いきなり相手は胸倉むなぐらをつかんできた。俺はほとんど意味が分からない。ただこの乱暴な上級生の態度に、急速に腹が立ってきた。相手の目を、正面から睨にらむようにきつく見つめ返した。

「なめとんのか、ワレ!？」

相手は壁に俺を押しつけて、巻き舌で捲まくし立ててきた。どこかで見た顔だと考えていたが、思い出した。34中隊の学生長で、毎日の大隊朝礼の時、短靴たんか（制服と共に支給される、黒い革靴）がよく磨みがかれていない下級生を見つけては、不意に後ろから殴りつけている桑原という四年生だ。その様子を見て以前から嫌悪感を抱いていた相手だったので、俺は敵意むき出しにしてさらに見つめ返した。一つや二つその場で殴られるのは承知の上だった。

《いつも一年生がおまえらを恐がっていると思ったら、大間違いだぞ》

そんな気持ちもあった。上級生には、絶対服従。そのことを笠かさに着て、下級生に対し、あまりにも不条理な態度をとる者が多すぎた。だから俺は、常に迫害されている一年生を代表する気持ちで、目の前の上級生に立ち向かっていく気持ちさえあったのだ。

「おまえ、どこの中隊だ」

桑原が尋ねてくる。作業服の名札を見れば分かるにも関わらずだ。

「32中隊です」

「名前は？」

「井上学生です」

「ほう」

桑原は怪しげに目を光らせると、胸倉をつかんでいた手を離して、意外にもあっさりと背を向けて離れていった。正直少しばかり安心して、だが桑原の後ろ姿を睨みつけた。

突然、横から張り手が飛んできた。

「貴様、なにを睨んどるんだ！」

別の上級生が、叫びながらまた俺の胸倉をつかみ、作業服のチャックがそのため引き裂かれて壊れてしまった。

「おい、おまえ、ひしきゆうさんまる1930（十九時半）に、俺の部屋に來い」

その上級生は俺の顔を覗き込むように見ると、自分の部屋番号を言って去っていった。  
《またか》

そう思っただけだった。上級生の部屋に呼び出されることなど、いつものことだった。

俺を呼び出したのはボクシング部の三年生で、藤岡と言った。一年留年しているので、四年生と同じか、それ以上に大きな態度をとっている男だ。その時までは知らなかったのだが、藤岡と言えば、多くの学生が恐れている存在だった。

上級生の部屋には、『着こなし』をして行かなければならない。制服（上着の裾をズボンの中に入れる夏の第二種制服や校内服の場合）であれ作業服（自衛隊で言う戦闘服。学生は生活時間中はこれを着ていることが多い）であれ、上衣に全く弛みたるがつかないように、両脇の部分できちりと折り返して、裾の部分をズボンの中に気持ちの悪いほど引っぱり込んで行くのだ。背中にわずかな浮き上がりができるのも許されない。体にびったりと衣服を張りつける感覚である。だから上級生の部屋に入るまでは、背筋を不自然に反らせたまま、まるで口ポットのように歩いていかなければならない。

指定の時間に行くと、藤岡は寝室のほうに入るように言った。当時、学生の部屋は自習室と寝室に分かれていて、寝室は見回りの当直幹部に覗かれる心配が少ないので、それだけ存分に下級生を『指導』することができた。

「おまえ、少林寺拳法部だそうだな。だったら拳立ての姿勢をとれ」

言われるままに、腕立て伏せの姿勢をとった。ただし握り拳こぶしを作った。

「おまえの上級生に対する態度は、なっとらん。だからこれから反省をする」

藤岡はそう言つて、自分も拳立て伏せの姿勢をとった。

おっ、と思つた。この上級生はまだまひきようしなほうだ。自分は立ったままで、下級生にだけ腕立てなどの運動を命ずる、卑怯な連中もいたからだ。だから俺は安心した。自分も一緒にやる以上、不条理なほどの回数をさせはしないだろう。それに腕立て伏せなら、かなり自信があつた。

「一、一、二、二、三、三、……」

初めの一で体を伏せ、次の一で体を起こす。そうして二百回ほどやっただろうか。まだ俺は平気だったが、目の前の藤岡は体を伏せたときに、床に胸をついているようだった。ゆっくりと号令を掛ける分、それは楽なやり方である。

《どうしようか》

このまま平然と続けて、彼よりも骨のあるところを見せてやりたい気持ちと、適当にくたばつた振りをして、早くこんな馬鹿らしいことを終わらせたい気持ちがあつた。

後のほうを選んだ。俺は自分も胸を床につけ、少々わざとらしいくらい突然に、苦しそうな表情を作つてみせた。

「おまえはあの時、睨んでいないと言ったな」

藤岡が話しかけてくる。

「まだそう言い張るつもりか」

「それは、かなり不機嫌な顔で相手を見ていたでしょうけど……」

前言を撤回する<sup>てつかい</sup>のは、さらにつけ込まれる要因となるので、中庸<sup>ちゆうよう</sup>をとった。また十回ほど号令を掛け、藤岡が言った。

「もう嘘<sup>うそ</sup>はつくなよ。よし、立て」

藤岡の部屋を出た後、不思議にも、わずかながら爽やかな気持ちがあった。

《少なくともあの上級生は、陰湿<sup>いんしつ</sup>ではなかった》

そんなふう<sup>な</sup>に思ってしまうほど、ひどい上級生が多かったということだ。

その日の消灯時間<sup>まぎわ</sup>間際に、インターホンのブザーが廊下に響いた。各階中央の集会室に設置してあるもので、ブザー音を聞いた者が、誰であろうと、たとえ廊下や自習室にいたとしても、ただちに受話器を取らなければならないことになっている。

取り次いだ学生が、廊下に顔を出して大声で俺を呼んだ。

「はい、324小隊、井上学生です」

インターホンに出ると、ドスを利かせた桑原の声が聞こえてきた。

「おう、おまえ、今日風呂場でしばかれた奴だろ——」

言われたまま、消灯後になって、俺は隣の学生舎に行き、中隊学生長室に向かった。

「入ります！」

ドアのすぐ横に脱いだ靴をそろえ、帽子を左脇はきに挟んで、顔は斜め上方を向ける。ドアは勢い良く開け、上体は『気をつけ』の状態を保ったまま部屋の中に踏み出す。簡単に言っ、こんな入り方をしなければならぬ。

「何じゃ！ その入り方は！」

ドアを開けた途端、数人の罵声ばせいが飛んだ。入り方に問題があつたわけではない。なにかにつけて因縁をつける、常套手段じょうたうしゅんだ。

「帰ります！」

やり直した。部屋から出て、また入り直すのだ。

「入ります！」

「何だ！ この着こなしは！」

ドアの近くで待っていた四年生が、いきなり俺の脇腹のあたりを両手でつかんで、上着を引き釣り上げた。

「帰ります！」

またやり直した。部屋の中で一番上の役がついている者に向かって、敬礼（帽子を被って

いないときはお辞儀じぎの形かたち）をして出ていく。不思議に思ったのは、呼び出した本人である桑原の姿が見当たらないことだった。

「待てえ！　なんだ、この汚い作業靴さぎょうかは！　てめえの点呼靴てんこかはこれか！」

またドアの近くの四年生が怒鳴った。顔も知らない奴だ。学生は白い運動靴が二足支給され、普段履くものを作業靴、整列点呼の時に履く真白な状態のものを点呼靴と呼んだ。ただしこの当時、正式にはそのような使い分けはすでになく、従って点呼靴という言葉も存在しないはずだった。だが学生の間ではいまだにその使い分けの慣習が残っており、使い分けをしていない者は皆無に等しかった。

「一回自分のところに戻って、履き直してこい！」

言われた通り自分の学生舎に戻って、靴を履き替え、また作業服の着こなしを同じ部屋の者に手伝ってもらった。とうてい一人でできる着方ではないのだ。そうして再び向かいの学生舎の、三階の中隊学生長室に向かった。

今度は桑原もいた。いや、たぶん初めからいた。部屋の奥に後ろ向きに置いてあるソファに踏ん返り返って座っていたから、見えなかったのだ。今回は俺が部屋に入った後、立ち上がって姿を見せた。

「第324小隊、井上学生は、桑原さんに呼び出されて、やってまいりました」

正しいと言われている言い方をするならば、「桑原さんに用件があり」と言わなければなら

ない。だが断じて自分からは用件などないのだ。そんな言い方はしたくなかった。部屋の奥にいた柔道部主将の関田が、あからさまに不満な顔をして口を開きかけたが、それより先に桑原がしゃべった。

「おまえ、なんで呼び出されたか分かつとんのか？」

妙にドスを利かせた、嫌な口調だ。陰険さをたたえた目で、ねちねちと見つめてくる。

「藤岡が言うには、あの後も俺を睨んでいたそうだな」

「そのことに関して、藤岡さんにすでに指導を受けました。でも私は視力が悪いので、遠くを見るときは目つきが悪くなってしまうのです」

言いながら、あまり上手な嘘ではないと思った。思った通り、つけ込まれた。

「じゃあなんだ、おまえはこんな距離でも睨むようにせんと見えんのか。あー？」

桑原は顔をさらにぐっと近づけてきた。

「いえ」

「ふざけんな！」

平手打ちが飛んできた。

「俺にしばかれとる間、ずっと睨んどったじゃろうが！」

そうしてまた二つばかり張り手を食らわせてきた。

「おう、今のおまえの態度よう、あん時と全然違うだろうが！　こんなけの上級生に囲まれ

て、急にびびったんか！」

確かに緊張していいことはなかった。普通の一年生ならば、これだけのメンバーに囲まれたら、それだけで泣き出してしまうほどの豪華な顔ぶれなのだ。だが俺が従順な顔を見せていたのは、自分が相手の気に入らない『反抗的な』表情をしていたために呼び出されたと分かっていたからだ。また風呂場の時と同じような顔を見せたら、そのことで果てしなく指導されることになってしまわないか。

桑原の隣に立っていた関田が、一步踏み出てきた。義務として、そちらに静態せいだいしなければならぬ。つまり下級生は、回りの上級生が何かを言う度に、体の正面をその上級生に向けてなければならぬのだ。

「てめえみたいな男の腐ったような態度にはよう、ムカつくんだよ！ その場の状況によって態度を変えやがてよう！」

上から打ち下ろす感じの、強烈な平手打ちをしてくる。

「おまえのような一年がいるから、防大が駄目になっていくんだよ！ おまえみたいにできない奴がいるから、今年の一年全員がなつていないって言われるんだよ！」

関田はがなり続け、俺の頬を殴り続けた。

桑原と関田は陰險な質問や脅し文句を並べ続けて、それにどう答えようと、どう対応しよう、結局は殴ってきた。

「気をつけだろーが！」

右手に立っているバラシュート部の西山が、膝のあたりを蹴ってくる。自衛隊式の気をつけは、両腕と体との隙間が全くできないように、ぴったりと腕を体側にくっつけなくてはならない。だからそんな無理な姿勢を三十分も続けていると、自然に体がふるふると震え出し  
てくる。

「震えてんじゃねーぞ！」

また西山が蹴ってくる。震えないように体側につけた腕の力を抜くと、また蹴られる。

「気をつけだろーが！」

部屋にはもう一人、合気道部統制の弾間という四年生がいる。その他にも見知らぬ四年生が、入れ代わり立ち代わり四人ほど部屋に入ってきては、腕組みをして威圧的な態度で俺のすぐ近くに立ちはだかつていった。興味本位の冷やかしである。

《こいつら相手に喧嘩したら、どこまでやれるだろー》

指導をされながら、俺はずっとそのことを考えていた。一番手強いのは、さつきから何も言わずにじつと様子を見ている弾間だと思つた。噂では学生隊一の体力の持ち主だ。顔つきにも、他の主立った三人のような陰険さはなく、だからこそかえつて危険な感じがした。

《だけど、どうせあと少しの辛抱だ。我慢しよう》

早くこの不愉快な時間が終わってくれただけを考えるようにした。一人の四年生に逆

らうことは、上級生全員に刃向かうことと同じだ。ましてやこの四人相手なら、明日から、いや、その瞬間から、防大全てが自分の敵になるのと同じだった。

指導という名のリンチ的な行為は、一時間半も続いた。その間に俺の顔は見事に變形していたようだ。四人の態度が、終わりごろになって急に柔らかいもの変わった。明らかに、やりすぎたという気持ちが生まれたと分かる態度だった。

「俺たちもな、おまえが憎くてやってているわけじゃあないんだ。おまえに立派な一年になってほしいがために、こうやって指導しているんだ。そりやおまえをただ痛めつけようってなら、この部屋には木刀だってある。叩く手を痛くしてまで、こうしてつき合ってやることもないんだ。俺たちは真剣にこの防大のことを思っているんだ。分かるか」

関田は、脅しと言いつつ自己弁護をごちゃ混ぜにした、変なことを言った。

「分かります」

そう答えるしかないではないか。四人は奇妙に満足したような、何か少しばかりほっとしたような表情で、俺を帰した。

この事件の話は、32中隊はもちろんのこと、3大隊はおろか、防大全体の学生の中で、あつと言う間に広がった。防大のような閉塞へいそくされた社会において、人の好奇心をそそる噂が広まるのは、ちよつと信じられないくらいの速さを持っていた。

同中隊の一年生は怒りと恐怖と同情の気持ちを持った。実際に腫れ上がった俺の顔を見れば、誰もがそんな気持ちを持って当然だった。四年生でさえも一部の者は、桑原たちの行き過ぎに対して、内心怒りを持っており、ように見受けられるところがあつた。

一番親身になつて怒つてくれたのは、対番たいばんの二年生の水原さんだった。対番とは、色々と直接面倒を見てくれる上級生で、逆に上級生から見て自分が世話をしている下級生も対番である。いわゆる一つの上下級生の関係の名称で、原則として、一人の下級生に対して一人の上級生がついていく。たいていは二年生の時に一年生を対番に持ち、その一年生が二年生になるとまた次の一年生の誰かを対番に持つ。だから防大にはずっと以前から続く、対番系列たいばんけいれつなるものが存在している。

「あいつら卑怯だよな。本当のこと言つて、前から気に入らなかつたよ。俺もどうにかしてやりたいけどさ、二年じゃあ、まだ立場が弱いからなあ。でも他の二年もかなり頭に来ていて奴らにはいるんだぜ。普段からおまえはふてぶてしいとか言われてるけどさ、それはそれで俺から見ればべつに悪いことじゃないんだ。なんか知らんが、二年の中にも、おまえのファンつてわけじゃないけど、応援してる連中はいるんだぞ。まあもうちょつと、おとなし目の上級生に接してくれればありがたいんだけどな。おまえがおとなしくないから、対番指導がなつていないつて、俺もずいぶん以前はやられたけどな」

「すみません」

水原さんには俺も弱い。素直に詫<sup>わ</sup>びた。

「まあ、そんなことより、今回のことだな。どうして部屋長の吉岡さんがなんにもしないのかが分かんないよな。濱崎さんなんかよ、34中隊学生長室に、殴り込もうかってまで考えたらしいぞ」

濱崎さんは俺と水原さんの四年生の対番であり、空手部主将であり、4大隊学生長である人物だ。部屋長とは、一部屋四、五人の一年生と共に生活をしている四年生である。吉岡さんは事件があった日、ちょうど平日外出で校内にいなかったのだが、帰校してからも、不思議なほどこの件に関しての興味を示さなかった。もっとも大方の上級生は、無関心を装っていた。

すでに防衛大は、体罰禁止の体制だった。もちろんそれは上辺だけのことで、毎日どこかで、誰かが体罰を受けている。それでも上級生たちは、ことあるごとに「今は楽になった」と繰り返していた。

俺はそもそも、入校の頃から上級生に目をつけられていた。

「あいつは『太い』」

まるで面識のない上級生や、同期の一年生まで、そんな認識で俺を見ていたようだ。

『太い』というのは、態度がふてぶてしいという意味である。

初めの頃は、自分自身でもなぜそんなふうに言われるのか分からなかった。

《他の一年と違って、妙におどおどとしたところがないだけじゃないか》

ところがおどおどしていない一年生は、上級生は気に入らないらしい。あるいはおどおどしてなければ、それを補うだけの愛嬌あいきょうが必要なのであった。俺にはそのどちらもない。上級生を不必要に恐れるのも嫌だったし、自分より強い立場の人間に媚こびへつらうことも嫌だった。そうして時が経つにしたがって、実際に俺はふてぶてしい一年生になっていったのかもしれない。

土日を置いて三日後、事件が指導官たちに知られることとなった。防衛大学校の学生隊は四つの大隊に分かれており、一つの大隊は四つの中隊、一つの中隊は四つの小隊から編成されている。そうして各小、中、大隊に、それぞれ現職の自衛官である小、中、大隊指導官がおり、学生の生活面での指導を主な任務としている。

知られるきっかけとなったのは、同じ小隊の末松という一年生が、大隊指導官に直接、抗議の書を提出したためである。末松は高校時代につっぱっていたと本人が言うだけあって、骨のある一年生だった。ただ上の者に対してはそれなりの愛嬌があったので、俺ほど目をつけられてはいなかった。

俺はまず小隊指導官に呼ばれ、事の内容を尋ねられた。調書が作成され、四人の四年生にはなんらかの処罰がくだされるだろうと説明があった。次に中隊指導官に呼ばれ、桑原と面

会させられた。

「君の指導に対して、行き過ぎがあったことを反省しています」

桑原はあまり俺とは目を合わさずに、言いくそくに言葉を出し、軽く頭を下げた。

《嫌なことになった》

他の暴力的な上級生は、今後ますます俺を目の敵かたきにしてくるだろうと思えた。根本の原因は彼ら四人の上級生だけの問題ではなく、防大に受け継がれているその体質そのものにあるのだと、指導官たちは分かっている気がした。

「まあ彼らも、ツイていると言えばツイていたと言えるだろうな」

桑原を帰した後、中隊指導官は不思議な笑みを浮かべて俺を見た。

「殴ったのが井上のような、体も心もがっしりした奴だったから良かったが、まあそのへんの軟弱な一年だったら、やれ傷害罪だって、へたすりゃ裁判沙汰まで発展する恐れがあるんだからな。いや、実際今年一件、そういうことが他の大隊であったんだよ。親がからんでくるとなあ、話がややこしくなってきた……」

煽おだてたようなことを言っているが、何のことはない。これはつまり、事件を外部に漏もらさないでくれという意味だ。そもそも俺は言われるほどがっしりした体格なんかではない。背は防大生の平均身長よりは低いほうだったし、体重は当初、入校の条件（身長に対する体重の合格範囲がある）ぎりぎりの軽さであった。

「今後このようなことが、どのような学生に対しても起こらないようにしていくつもりだ」  
中隊指導官はそう言つて、俺を帰した。

《本当にそうなればいいが》

この件がきっかけとなつて、少しでも暴力指導がなくなればいいと思つたが、実際にはそうならないだろうとの思いが強かつた。ただ一つだけ確実に分かつたのは、この防大においても、暴力行為は悪なのだという、それだけのことだつた。

### 石コロの生活

四年生は神様、三年生は人間、二年生は虫けら、一年生は石コロ。

俺が入校した昭和六十二年は、まだそんなことが言われている時代だつた。上級生に敬礼をしなかつただけで殴られたり、呼び出されたりするのは当たり前。上級生に対して完璧な敬語を使わなければ、怒鳴られたり、腕立て伏せを強要されたりもした。帽子と靴を身につける順番が違つただけでも、確実に怒られた。

学生の一日は、毎朝六時半の起床ラッパの放送で始まる。それより早く起きてはならない。ラッパが鳴ると同時にベッドから跳ね起き、大声で「おはようございます！」と叫ばなけれ

ばならない。毛布とシーツを決められた通りにきちんと畳み、上半身は裸はだかになって、作業服のズボンを履き、タオルを手に持つ。寝室を出たら靴を履いてから帽子を被り、廊下や階段を全速力で走っていつて学生舎の前に整列する。

各小隊四列横隊おうたいで整列したら、前列になった者が順番に号令調整をかけていく。「頭、右！」とか「整列、休め！」とか「捧げ、銃！」とか、自衛隊で使われる号令を、なんでもいいから大声で叫ぶのだ。残りの学生はタオルで乾布摩擦かんふまさつをしながらそれを復唱する。

小隊の全員がそろったところで、小隊週番が号令調整をやめさせ、点呼をかけ、人数を把握あくし、報告書と照らし合わせ、間違いがなければ中隊週番に報告する。中隊週番は四つの小隊の点呼報告を受け、間違いがなければ大隊週番に報告する。大隊週番は四つの中隊の点呼報告を受け、間違いがなければ当直幹部に報告する。

以上が、起床後五分以内に完了しなければならない。冬は毛布を六枚も（使用する毛布の枚数が強制されるときがある）畳まなければならないので、特に最上階の四階に部屋がある学生は大変だった。畳み方が悪いと、点呼を免除して見回っている学生長に、窓から外に容赦ようしやなく捨てられた。もつとも上級生になると、毛布をきちんと畳んで出ていく学生のほうが珍しかったはずである。

日朝点呼後の、学生舎や校内の清掃は、上半身裸体のまま一年生が行なう。中には膀胱ぼうこうに小便をパンパンに溜めたまま、トイレに行くのも我慢して清掃を始める者もいた。清掃場所

に駆けつけるのが遅ければ、監督かんとくに当たる二年生に指導を受けるからだ。四年生や三年生はその間、新聞を読んだり、好きなことをしている。時間外就寝じかんがいしゅうしんは禁止されていたが、再びベッドに横たわって眠り始める上級生がいることも知っていた。

清掃が終わると朝食。食べるのは義務であるので、朝食を取らないことは許されない。その後朝礼。たいていは大隊朝礼で、各学生舎の前で行なわれる。国旗掲揚の時間がくると『君が代』（防大では当然『国歌』という）が放送で流れ、その間、学生や指導官は国旗掲揚台の方向に対して静態を続けなければならない。月曜日には四年生による三年生以下の容儀点検ようぎがあり、衣服にきちんとプレス（アイロン掛け）されていなかったり、着こなしが悪かったり、髭ひげの剃り方が甘かったり、真鍮製の徽章きしょうにピカール（研磨剤）掛けされて光っていなかったり、必携品（白ハンカチ、封を切っていない携帯ティッシュ、学生手帳とボールペン、机の鍵つき財布。詰め襟の制服の場合にはエチケツトブラシも）を持っていなかったり、した者には『不備』ふびが宣告されるので、週番に報告書を提出して、翌日の朝礼が始まる前に、各中隊の廊下に整列して再び容儀点検を受ける。

初めの頃は、まあほとんど全ての一年生が、水曜日まで掛かって合格する。少しでも気を抜けば瞬時にして崩れる『着こなし』が完璧に決まっていなければならないし、衣服には皺しわが一つ、糸くずや埃ほこりが一つあっても許されない。ベルトの末端がバックルから出過ぎてもおなすぎても不備。帽子をわずかに斜めに被っていても不備。中には土曜日になってもなお

受からず、その夕方に再々再々再点検を受ける者までいた。

朝礼後は、各班に分かれての課業行進。隊列を乱したり、腕の振りが悪かったり、余所見よそみをしたりすると、要所要所に立った週番からの罵声ばせいが飛ぶ。落ち着けるのは、教場きょうじょう（教室）に入つて、一年生だけになるときのみであつた。

防大における課業の内容は、一般の大学で行なわれる講義や授業とほぼ変わりがない。特別なのは防衛学や国防論、それに実際の訓練がある程度である。当然全ての課業を受けることは義務なので、無断欠課は許されない。

昼休みには、学生隊約千八百人が一つの学生食堂に入つての、一斉喫食いつせいきつしょくがある。食堂内にも細かい規則があつて、食事を樂しめる雰囲気ではない。だいたい味はかなりひどい。

午後の課業が終わると、四時前後からは校友会の時間である。いわゆるクラブ活動だ。一年生は全員なんらかの運動部に属さなければならぬ。概ね午後六時にクラブが終わつた後は、風呂に入る。あるいは夕食が先でも良い。一年生は風呂場の椅子を堂々とは使えない。ずっとしゃがんだ姿勢で体や頭を洗う者がほとんどだ。混雑しているときは浴槽にも入れない。

風呂と食事のすんだ後から八時までは、生活時間と言つて、自由な時間であるが、これも初めの頃は、なんだかんだと言つて自由にならない時間である。衣服のプレス掛けのために毎日一時間以上使う一年生も珍しくない。不器用な者はスプレー糊のりをかけすぎて、まるでプ

ラモデルのような服を作り上げていた。去年まではこの時間に整列点呼があったらしく、それがなくなつた分だけでも、かなり楽になつたと二年生が漏らしていた。整列点呼は下級生にとつては緊張を強いられる苦痛の時間だからだ。

自習時間は勉強をしなければならぬ。部屋には四年生の部屋長がいたし、週番や当直幹部が不意に見回りにやってくる。夜の日夕点呼（これは小隊週番が各部屋に回ってくる）の（これは小隊週番が各部屋に回ってくる）後には、また清掃（点検）が五分から十分ほどあり、十時半消灯。物悲しく消灯ラッパの放送が流れる。ただし申請すれば、十二時までの延灯（えんとく）ができた。

土曜日の午後からと、日曜日には外出ができた。ただし一年生は、制服での外出に限られる。外泊は禁止。定められたその日の帰校点呼時間までに帰らなければならぬ。しかも週番室で、あるいは定時に行なわれる外出点検で、容儀点検を受けて合格しなければ外出は許されない。点検を受けるのが嫌で外出しないでいる一年生は、注意や指導を受けることがある。

俺は初めから器用にプレスとか着こなしができたほうなので、比較的楽に外出ができた。それは対番の水原さんの指導のおかげでもあったし、前期（着校日から夏休みまでの期間）の同部屋（前期（着校日から夏休みまでの期間）の同部屋）の、少年工科学校卒業生の諸星のおかげでもあった。少年工科学校は自衛隊の初級幹部を養成する、言わば自衛隊の高校のようなもので、諸星はそこで身につけた自衛隊式の

生活のコツを、よく内緒で同部屋の俺たちに教えてくれたのであった。

「実際、前期の俺の部屋は、小隊の中で、あるいは防大の中においてさえも、かなり特殊な部屋であったと言っている。部屋には四人の一年生がいた。」

一人は前述の諸星。少年工科学校卒の一年生は、防大にたつた五、六人しかない。

一人は松風塾しょうふうくという、これまた防大以上に厳しいと言われる全寮制高校出身の三久保。ちなみにこいつの部屋の中でのあだ名は『悪魔』で、ふてぶてしさや態度のでかさは俺の比ではなかったが、なぜか不思議と上級生には目をつけられない上手さがあった。

実は暴力指導で呼び出された時に、俺が従順な顔を見せたわけ訳の半分くらいは、こいつの直前の提言が原因している。

「『私は善良な一年生です』ってかわいい顔見せてれば、たいしたしびきなんか受けないぜ」その言葉を真に受けて実践した俺も間抜けだが、「かえってダメだったじゃねーか」と睨んだ俺を笑い飛ばした三久保は、やはり悪魔というあだ名がふさわしい奴だった。だが不思議と憎めない男である。

それからもう一人は、二浪して入ってきた藤原で、部屋では一番無難な一年生ではあったが、どこかつかみどころのない、ちよつと飄飄ひょうひょうとした人物であった。

そして俺は前期も早々から、学生隊一『太い』一年生と噂されていた。

一年生が初めて外出を許されるのは、入校して三週間ほど経った頃だ。しかも部屋長と一緒に部屋単位で出掛ける『引率外出』である。俺たちの部屋は早速その時から『帰校遅延』をしてしまった。点呼時間に遅れての帰校である。もつとも、正確に言えばこのときは『しつけ時間遅延』だった。しばらくの間、一年生は正式な点呼時間よりも一時間早く帰校して予備点呼を受けねばならなかったのだ。つまりは万が一にも点呼時間に遅れる事態がないようにするための対策であるが、規則を破ったことには違いない。部屋長の大池さんが全ての責任を取って、毎朝一週間、日朝点呼後に背囊はいのうを背負しよって小銃しょうじゆうを持って走ることによって、一年生たちへの処罰は免除された。

ところがその引率外出から二週間後の日曜日、俺と三久保と藤原は、まだ他の一年生が誰もしていないであろう私服外出を試みたのだった。これは防大の中においてはとんでもない冒険と言えた。この時期すでに一年生は、しっかりと別世界——防大の規則を身に叩き込まれている。見つければ防大側からの処罰を受けるのはもちろん、上級生からどのような『指導』(こちらのほうがるかに恐ろしい)があるか分からない。

そもそも防大に着校した時に着ていた自分の服は、入校式の時に親の手で持ち帰られている。大学生にもなっておかしな感じもするが、防大の入校式は原則として両親が出席することになっている。そして親が自分の息子の私服を持って帰るのは、脱走する一年生を減らす、防大の策の一つであるのだ。